

「あいち花と緑を活かした健康増進地域づくりフォーラム」設立準備会
第5回勉強会（議事録）

- 1 日 時 平成18年6月26日（月） 13:30～16:00
- 2 場 所 あいちNPO交流プラザ 会議室A
- 3 出席者 配布資料：「あいち花と緑を活かした健康増進地域づくりフォーラム」設立準備会・第5回勉強会参加者のとおり

4 内 容

(1) 問題提起

講師&コーディネーター：伊藤達雄氏（名古屋産業大学名誉学長・特任教授）

- ・今まで、愛知を中心に、花と緑を活かしながら健康増進まちづくり・地域づくりをどのように進めていったらよいのかという大事なテーマについて勉強会を続けてきております。今日は、加藤先生をお招きし、「心理学から見た社会の病と癒し」というテーマでお話いただくこととしました。健康とかまちづくりという時に、心理学からのアプローチは欠かせない時代になってきています。このことは第3回勉強会で名古屋産業大学の和泉先生から、まちのかおり、色を中心にお話いただき、こうしたものが人間の健康や心理に関係が深いということがだんだんわかってきているという話を伺いました。今日は、さらに、臨床心理の先生から人間の内面に切り込んだ話を承って、花と緑と健康、まちづくり、心理学がどういう関係にあるかを勉強する大変貴重な機会であります。
- ・勉強会は今回で5回目となりますが、以前からそろそろ、この準備会をもう少し組織化して実践的な活動の出来る組織にすべきということを申しあげてまいりました。前回は、環境省の炭谷事務次官にお越しいただきお話いただいております。炭谷氏を中心に環境福祉学会という組織が一昨年発足しており、今年は第2回目の学術大会が予定されていますが、その中心が炭谷事務次官です。従来、「福祉」というと、厚生省の管轄で、炭谷氏は同省の出身で、その後環境省に移られて事務次官にまでなりましたが、「環境」と「福祉」というのはつながりのあるこれからの課題であるというお話をされました。今、環境や福祉の問題、あるいはまちづくりの問題というように、横断的に評価される時代となっており、この「あいち花と緑を活かした健康増進地域づくりフォーラム」が果たすべき役割は極めて大事なものがあります。今日は、加藤先生のお話を伺って、これまでの5回の勉強会を踏まえて、われわれが次のステップにどう進むかということを議論していきたいと思っております。

(2) 講演「心理学から見た社会の病と癒し」

講師：加藤 幸雄氏（日本福祉大学副学長・社会福祉学部心理臨床学科教授）

- ・私の専門は犯罪心理学という領域であります。毎年、大学の公務のほかに、犯罪心理鑑定という仕事をずっとやってきており、今年で18年になります。
- ・犯罪心理鑑定の対象のほとんどが殺人ですが、殺人犯にしても放火犯にしても、人間という自然を壊す人達との付き合いということになります。最近、本当に多いというのが実感であり、今までなら事件にならなかったような類のものが起こっています。

- ・本日の午前中、中日新聞社のカウンセリグの手伝いに行き、何件か相談を受けてきましたが、最近の相談の傾向は犯罪と同じで、本来、地域で解決しているはずの問題が大仰な相談として寄せられてきています。本人からすれば深刻な問題で、どこに相談してよいのかわからないのですが、これは犯罪者も同じです。キーワードでいえば「孤立」です。本人の側からみれば、独りよがり、自己中心的、周りが見えない、共感からほど遠い状況で問題が起こっています。
- ・レジュメにある天国の食卓、地獄の食卓というのは、そのことの象徴的な言葉として挙げています。どちらの食卓もバイキング形式で長い箸を使うという同じルールなのですが、地獄の食卓ではわれ先に食べようとして結局食べられない。天国の食卓では、順番に、相手が食べて次に自分が食べさせてもらえれば済む話で、その発想が出来るか出来ないかの違いで同じ食卓でも天地の差があります。
- ・犯罪というのは多かれ少なかれ地獄の食卓型の面はあるのですが、それが極端化しているのが最近の傾向です。なぜ、そこに至るまでに違う道筋を選ばなかったのか、ホットな話題でいえば奈良の少年による放火殺人事件も、普通は友達とつるんで暴走や万引きをしても、人殺しにまで至らずに終わるケースが圧倒的です。要するに自分の中で違う持ち場、違う世界を持っていたのです。ほかに受け皿や逃げ場があって違う社会集団が出来ていればほとんど解消されるはずなのですが、調べていくと本当に孤立しています。自分の世界で、時にはバーチャルの世界で、自分だけの思いが先行して間違った結論に至ってしまいます。
- ・この勉強会のテーマに関連づければ、ゆったりした自然やくつろぎの場所、癒しの空間がどこかに見つけられるはずなのに、そうした人達に限ってはすごく狭まっています。犯罪だけでなく自殺も同じです。いろいろな事情はあるでしょうが、生きるための空間や場所、気持ちが落ち着くようフィードバックが出来る状況を完全に無くしてしまった人たちです。
- ・最近、虐待死事件の鑑定を仰せつかっており、武豊の餓死事件も担当し、長い時間、夫婦や家族と付き合いました。児童虐待は、とにかく統計を取り始めてから極端な右肩上がりの状況です。欧米では当たり前ですが、2004年の法改正で、疑わしきは罰するという方針に改められました。また虐待の範囲も広がられました。
- ・一番心配なのは虐待死の数で、1週間に1人死んでいます。これを多いとみるか少ないとみるかですが、たとえば公衆衛生の立場から、狂牛病でこれだけの数字であればどうでしょうか。もう騒がなければいけない状況を通り越しています。また、国際的な統計だと日本は3日に1人死んでいることになります。日本の統計では親子心中は虐待に入れていませんが、国際的な統計では虐待死に入ります。
- ・虐待の原因は、滅茶苦茶な親がやっているかというところでもありません。ほとんどの親は、子どもを一生懸命に育てて立派にしたいのですが、うまくいかずに混乱を子どもにぶつけています。これも逃げ場がないのです。旦那が協力しているとか、周りに相談する人がいればよいのですが、自分と子どもだけの関係に純化されて、そこで頑張るけれど頑張りがきれいなのです。自分のストレスを解消することが出来なくなって子どもに八つ当たりし、子育ての不安が高まり、やがて手をかけることになってしまいます。強迫的な虐待で、いい子に育てなければという思いが強いのですが、どうしたらよいのかわからず、その混乱の中で余裕を失っていくのです。この場合も、逃げ場や癒しの空間が失われています。
- ・虐待で深刻なのは発見の遅れです。家の中のことであり、40%以上は1年以上経ってから発見されています。これが深刻な問題なのです。
- ・心理学の領域で愛着障害という言葉があります。基本的な信頼関係が形成されない、それどころか信頼していいのかわからない不安を抱えて自分の人生のスタート

台に立つわけです。さらにさまざまなマイナス要因が積み重なって、そこから回復出来ない事例が相当数あるのですが、その子たちが重大な問題を起こしたり、非行に至るケースも相当あります。

- 俗に虐待は遺伝するといいますが、あながちおかしなことではありません。虐待する親の中には、自らも被虐待経験を持つ人が少なくありません。最も信頼せざるを得ない人にもっともひどい裏切りを受けるといって、大変なことを人生経験ゼロの子が経験するのです。それを克服しながら人生を歩いていくというのは、まさにハンディキャップ・レースといえます。
- 3年前、愛知学園という児童自立支援施設で、収容されていた4人の中学生が宿直の男性を殺して逃げ、近くのコンビニにいるところを捕まったという事件がありました。彼らはひどい愛着障害の子たちでした。客観的にみれば加害者に決まっていますが、彼らの内部的な面からすると、その気持ちがどこにも受け止められていなかったのです。人の心に封印された不信、特に子どもの頃に植え付けられた不信というのはそんなに簡単に癒されるものではありません。木曾川リンチ殺人事件の犯人の少年たちも同じです。もちろん犯罪は肯定されるものではありませんが、彼らの側に立てば、そこに追い込まれる歴史の出発点において、愛着障害が大きなウェイトを占めています。
- 武豊の虐待死事件の母親も一言でいえば、ひどい目にあって人生を送ってきたということに尽きます。そうした人生に直面しながら、明るく素敵なお家庭をつくりたいという願いが強く、育児日記も几帳面につけていました。そうした思いとは裏腹に、それが心の中では明るく拮据しないという現実と直面してしまいました。なぜかといえば、自分自身の家庭像というものをつくれなかったからです。どんな家庭をと言われた時に、しあわせ、やさしい、すてきな、ということが言っても具体的にどんなものかと言えないのです。旦那がすごく素敵に見えたようですが、家庭という基準からいけば用をなさない、お荷物的状況でありました。
- 2番目の不幸は子どもがハンディキャップを負ってしまったことです。ただ、その時点ではまだ育てたいという気持ちがあったのですが、1歳6ヶ月検診の時に一変してしまいます。他の子どもたちと明らかに様子が違い、恥ずかしくて少しでも早くそこから立ち去りたいという思いに駆られてしまいました。父親は、それから可愛がらなくなってしまいました。その後健康そのものの年子の弟が生まれ、父親の関心も下の子にしか向かなくなってしまいました。上の子は親の関心を引くためにいたずらをするのですが、そうした子どものメッセージを受けとめる余裕もなかったのです。
- 1歳6ヶ月検診の時に、専門職の人が、これから一生懸命に育てて、みんなの中で過ごせば少しずつ変わっていくと助言したのですが、もともと不信感が強く気持ちが塞いでいる状況でその言葉を母親がどう受けとったかといえば、デリカシーのない専門職だと感じてしまったのです。こんなに恥ずかしくてすぐにも帰りたい状況なのに、また人中へ来いとはどういう感覚だと思ってしまったのです。
- 対人不信が強く、ハンディキャップを負った子どもの重さということに共感をもらえないという不安にさいなまれ、以後、どんどん孤立化していき付き合いが減っていききました。逃げ場がなくなり自分だけの子育てが始まります。余裕のない、癒しの場のない空間に追い込まれ、結局、子どもは3歳になる前に亡くなってしまいます。子育てしなければならぬが出来ない自分を同時に感じながら、餓死するのを待つことになっていたわけです。警察に届けた時には母親は脱力状態でした。名古屋拘置所で最初に面会した時、育児日記や警察の記録を読んでいたのですが、大変だったねと声をかけたら、泣き崩れてしまいました。そうした言葉をかけられたのは初めてだったらしく、堰を切ったように自分の生き様を語り始めました。
- 子育て不安が虐待の要因と言いましたが、不安を持っている人は多いのです。いろいろ

るなアンケートをとっていますが、50%を切ることはありません。虐待してしまうかもしれないというアンケートでも10%強の数字になります。

- ・子育ては、人間にとってもっとも高い能力を要する仕事のひとつだと思っています。言い方は悪いですが、とても微妙な製品を完成させるということです。これを不慣れた熟練工でもない二人の男女、あるいは母親ひとりで出来るかどうか、ということがあります。
- ・ところで保育園では既に異変が始まっています。自分の関心のないことには全く取り組もうとしない子ども、間違いや失敗に過敏に反応する子どもたちが増えています。また5歳児くらいだと物の貸し借りなど社会性が出てくる時期ですが、そういうことが言えずに自分の欲しいものは力づくで奪ってしまうなど、数年前までは見られなかった現象が増えてきています。子育ては共同で支え合って、学び合って、そこで利口にならないかぎり育たないと思っていますが、この支え合いが大きく後退する事態が子育ての領域でも起こっています。
- ・次に犯罪非行であります。何が一番変わったかといえば、犯罪は社会の基準にあわない不適合なものと定義されてきましたが、社会に適合しすぎる人が犯罪者の列に加わってきています。これを過剰適応と呼んでいます。奈良の事件も過剰適応です。親の期待だけでなく、彼自身も医者にならなければならない、もっと勉強しなければならないという思いが自分の中の価値として形成されているから苦しいのです。親だけの思いであれば離脱すればいいだけの話ですが、自分自身の思いも強く、その呪縛から抜けられなかったのです。
- ・実は、犯罪の領域よりももっと広い領域で、この過剰適応は進行しています。古い話になりますが、高度成長期がひとつの変換をもたらしています。「働きバチ」という言葉があります。一生懸命やるのは人間の属性でありよいことですが、過剰に頑張りすぎるとよくないのです。さぼったり、癒すという逃げ道があれば大過なく済みますが、気が付かずにストレスに適応するくらいに過剰に適応してしまう人がいるのです。周りから見ると、すごくよくやっている、しっかりしている、頑張っているという人がある日突然消えてしまうのです。舞い上がりすぎて、自分の位置を見失い、これ以上頑張れないところに行ったら人は落ちるしかなく、この病気がうつ病です。うつ病にもならない人はどうなるかという死ぬしかありません。いわゆる過労死です。これは他の国ではみられない現象です。
- ・学校教育でも同様です。児童の権利に関する条約があり、国連から2～3年おきに査察を受けていますが、日本に対する最大の勧告は、学校社会が過度の競争社会になっており改めるべきとの内容です。これも過剰適応であり、この状況の中で起こっている現象が不登校です。不登校にもさまざまありますが、中心になるのは真面目に勉強しなければいけない、しっかりしなければならない、遅刻・欠勤をしないように、という強迫性です。きっちりやるのはよいが、やりすぎてしまって自分自身の心の基準から大きく外れてしまうのです。学校へ行かなければいけないという思いが強いのだが行けないのであり、極度の葛藤の状況が処理出来ないまま引きこもってしまいます。今、ひきこもりは100万人を超えており、ニート・フリーターの問題の前に、このひきこもりという概念を無視して通れない状況になっています。8～10年かかる人もいるし、30代半ばになるのにまだ出てこない人もいます。
- ・中学校を中心とした不登校は一定数、年中行事のように決まっています。それが非行の領域でも起こっています。非行の領域では何かというと、もうこれ以上頑張れなくなって自分でどうしていいかわからず爆発してしまう現象です。これを行動化と言います。奈良の事件の少年も普通の方法で動機を聞いても出てきません。親に殴られた、叱られただけでは人を殺さないものです。なぜわからないかといえば自分でもわから

ないからです。いろいろな要因があり、動機を聞く人によって意味づけが違ってきます。ある評論家はリセットしてもう一回やり直したいからと言っていますが、それは大人が考えた論理であり、本人はそんな洒落たふうには考えてはいないのです。どうなるかわからない賭けをやっているのです。少なくともはっきりと言えるのは父親という大きな壁に立ち向かえるほどの自我はないのです。なぜ父親がターゲットにならなかったのかと大人は論理的に考えますが、そういう話ではなく自分の中の過剰適応を精算したのであり、どうしてよいかわからなかったのです。ワルの仲間でもいれば違っただろうし、家出という方法もあったでしょう。どこにも逃げ切れなくなり追いつめられて、こうしなければならないという思いが強いのであり、この少年は今でも医者にならなければならない、勉強しなければならないという思いがあると思われま。一方、はかない夢、やりたくない夢という思いもあり、自分の中で整理がつかなくなっていました。父親に従って医者にならなければならないという思いと、あんな父親のようにはなりたくないという思いが同居しているのです。

- ・もうひとつキーワードを挙げるとすると、支える人との関係がどうかということが大きいです。人の社会の中で受け止められているかどうか。暴走族やヤクザは悪い集団ですが、集団という点だけに着眼すればそこでかなり吸収できます。適切な言い方ではないですが、暴走族やヤクザであれば、奈良の事件のようなことにはならないのです。奈良の事件は思い詰めてどうしようもなく、そこしかいられないという孤立化が特徴です。孤立化していく中で、現実感覚がどんどん乏しくなっていくのです。
- ・孤立というハンディキャップとハンディキャップによってできるリスクがソーシャル・リスクです。育ちの過程でのハンディキャップがソーシャル・リスク、対人関係の中で孤立化していくハンディキャップ、この二つの関数として犯罪・非行を表せます。また、思春期は、自我というアイデンティティを獲得していくプロセスです。自分自身が自分をコントロール出来るまでに長い時間かかるので、そのコントロールの揺らいでいる時期にもっとも非行が多発するのです。いつの時代でもそうで、平均すると14～17歳に非行の頻度が高く、これは世界的にも同じ特徴であります。
- ・社会力、共生力、お互いに関心をもって、関わり合ってお互いに支え合う力と定義されますが、この関わりがなくなっています。人に迷惑をかけずに生きることは出来ないし、程々に迷惑をかけ合うという関係を学ぶのが育ちのプロセスです。こうしたことがすごく後退しています。人間の五感を使いながら支え合うという関係を考えるときに、この社会力が身につかないまま自分で何でも出来ると思った時に大きな間違いが起こります。単純な例でいうと、喧嘩して仲直りする関係が後退しています。トラブルというのは、もっとも人間関係が激しく出るところです。喧嘩しっぱなしでなく仲直りするプロセスが、人間の社会関係の基礎関係を意味しています。そうした葛藤場面の中で、自分自身が鍛えられ他人の内面がわかることによって自己の内面や個性が出てくるのです。その単純な営みが切れており、子育ての行き詰まり、不登校での閉じこもり、過剰適応による犯罪につながっています。
- ・あうんの呼吸といいますが、そこに通じる関係性はとても重要です。藤本義一氏が言っていますが、日本は世界の中でも夫婦のコミュニケーションが一番少ない国です。1日あたり5分だそうですが、一番長いのはソマリアで5時間です。ソマリアではコミュニケーション時間が短いことが離婚理由になります。笑い話ではありますが、時間という概念も共生という関係の基礎になります。
- ・コミュニケーションの中でポイントを挙げろといわれれば、聴くということです。一歩引いて会話が成り立つというのは、相手の立場がどうだろうかということが見えているかどうかです。相手が子どもだろうと誰であろうと、そこに足を踏み入れる会話が出来るかどうか。社会福祉の領域では、これがきちんと出来るようになれば一人前

だといわれます。相手が今どんな気持ちでいるかを深く考えながら生活しているかという問いであります。相手の気持ちを考える時に、相手の気持ちを考えられる武器は自分の気持ちしかないのです。

- ・学校環境の例をいうと、少し上の年代では学校とは楽しいところでありました。それは学校がサロンであったからです。学校は勉強をやる場所という観念はあったが、それ以上に人に会って楽しいところというのがあったのです。ところが、これがだんだん逆転してきています。ある臨床心理士が言っていました、学校という社会は、あるべき目標に向かって、きっちり、早く、何かを達成するという図式がダントツで大きいそうです。このような流れに沿うかどうかで評価が決まるのです。こうしたことを全否定するわけではないですが、その裏側にある、あるがままの気持ちをゆっくり確かめるといって側面がサロンです。これらのバランスを回復するためにスクールカウンセラーが入れられました。スクールカウンセラーが何をするかといえば、癒しのコーディネーターであります。従来は、学校の先生をカウンセラー養成して一人二役という時代がありましたが、みんな失敗しました。前者と後者の調和は難しいものです。癒しの場合は、別の空間・場所が必要です。
 - ・最後に子育てネットワークとまちづくりですが、これはまさに花と緑を活かした健康増進地域づくりフォーラムのテーマにふさわしいと思います。人間とのつながりを強調していますが、自然を含めて生きる空間をどう見直すかという課題であります。
 - ・厚生労働省の子ども子育て応援プランというのがあり、平成21年までの目標値が掲げられています。4つのプランがあり、ひとつは子どもの社会参加であります。日本福祉大学では自治体提携ということをしており、提携先の山形県遊佐町では、子ども議会がつくられました。模擬議会はよくありますが、本議会であり予算もつけられました。近いところでは、高浜市で、子どもから大人まで含めたまちづくりの委員会をつくり、みんなが智恵を出し合い、考えましょうということをしています。こうした参加を促すということが大事です。2番目は父親の育児参加です。企業への協力をお願いしたいと強くうたっています。働く生産現場はもちろん重要ですが、そのバランスを少し変えるという理解をもらわないかぎり無理です。国の調査では、育児休暇をとりたいという人は60%ですが、実態調査でいうと0.5%にも満たない。育児休暇がすべてよいかどうかはわかりませんが、少なくとも孤軍奮闘で追いつめられる事態にならないためには、パートナーだけでもクッションになれる環境が必要です。父親が子育てをさぼっているのは人間社会だけで、自然界ではそうではないのです。3つめは子育て理解であります。さまざまな世代の相互理解です。群れをなしているいろいろな年代と関わり合うことが必要です。それには地域に出るしかなく、リスクも背負いますが、必要なことです。最後に地域の子育て支援であります。地域の防衛というよりは、地域ぐるみで支え合って出会う空間がどれだけ出来るか、そういう居場所があります。そこの中には、人だけでなく、さまざまな付き合いが出来る場所・空間、井戸端も含めて、コミュニティの一員として出番がつくられることが必要です。高浜市では、たとえば魚の三枚卸しを生涯学習講座として、まちの魚屋さんが講師をします。それを通じて人が交流するわけですが、教えてもらう時は相手を尊敬するものです。そうした相手の優れた部分、自分の持っていない部分、あるいは相互に刺激し合いながらお互いが尊敬し合い、認め合い、自分自身も自信をつけていくのです。これは大人も子どもも一緒であり、そういう中で子どもが豊かに育つのです。こうしたことの進展・復興がすごく大事だということで、それを強調したプランが出されているということは大変素晴らしいことです。これに応えていく自治体の努力というものは大変でしょうが、やらなければならない課題であります。
- 以上で私の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

(3) 質疑応答

・市民活動 佐藤氏

先日、18歳の少年犯罪に対して2人とも死刑判決がなされましたが、そのことについて女房とコミュニケーションをとりました。被害者感情を考えるとかわいそうだという考えがある一方、彼らを社会に戻した時に再犯に陥るのではないか。更正に向けて数少ない保護司では対応しきれないのではないかとといった社会全体の受入れ体制がないことを考えると、あの2人に下された判決は、われわれ社会全体に対する死刑判決のような重いものと感じました。また、女房からは、被害者がかわいそうという自分の気持ちを受け止めてくれない、共感してほしいのに共感してくれないということを言われました。

・日本福祉大学 加藤副学長

山口市の事件で最高裁差し戻しがあったが、被害者感情の視点からいえば当然のことだと考えます。ただ、そのことは別にして、加害者のことをどれだけ知っているかといえば多分誰も知らないのです。私の仕事は、加害者がどんな思いでそこに到達したかということ徹底的に究明して本人自身にわかってもらうという仕事があります。そして、そのプロセスを社会が知ることによって、防衛的・予防的な対応を考えられるし、本人が生き直そうとした場合にそのことを深く受け止めて次のステップを歩むことになります。被害者がそれを許すかどうかはまったく別問題です。社会防衛的に、治安対策的に何が適切かというのは、その時々政府が考えることであり、何が正義かということはなかなか難しいものがあります。もうひとつは生き直しであります。犯罪者の数はすごい数だし、受刑して出所している者もおびただしい数です。再犯率というのがあるが、未成年の再犯率が30%を超えたことはありません。大変な事件を起こした者もいますが、一方で社会貢献しながら生きている者もいるというのも事実です。共生するという視点から何かそこで可能性があるかどうかを考えてみるというのはすごく大事な視点だろうと思います。すぐには実現出来ない場合があったとしても、その視点を失うと犯罪者は更正しようがないことになってしまいます。大事なことは、加害者について、どんな気持ちであったかを知ることです。山口市の事件では思春期に母親が自殺しているということがどんな影響を及ぼしたのか、もちろん事件は肯定されるべきものではありませんが、いろいろな事実がわかってきて自分が同じ生い立ちに立った場合、どんな人生を歩むのか、人が信頼出来ないところから出発して、社会になかなか居場所を見つけられず、20歳になる前に転落しなければならない人生とは何だろうか。当人には、だからやっていいわけではない、何か出来なかったかということ問い返すこと必要はあります。私は被害者の味方でも敵でなく、異質の立場からものを見るということが共感・共生の中身のひとつと考えているので、その視点は忘れないようにしたいと思います。違う立場でものを測っていくところに、何をすべきかという答えが出る瞬間があると思います。

・愛知県 知事政策局企画課 金沢主任主査

不登校、引きこもり、ニート対策に頭を悩ませています。このフォーラムのテーマである花と緑をうまく使えないかと考えています。地域のコミュニティで花や緑を使った活動をしている人達と一緒に外に出て話をしながら活動するというのも一つの手法ではないかと思えます。市民活動をしている方と協働で福祉事業が出来

るといいと思うのですが、その点についてご助言をお願いいたします。

・日本福祉大学 加藤副学長

不登校の子どもでも、学校には行けないが、他の所には行けます。学校という自分にとって呪縛のある所では身動きがとれないのです。学校に行かねばならない、いい成績をとらねばならないという強迫性が強いからです。やらなければならないが、やりたくない、やれないという自分が同時に共存するのです。花と緑という、学校とは違う空間の中で違う対応をした時は、変化する可能性は十分あると思います。もうひとつ花と緑がいいのは、こころの語らいが出来ることです。コミュニケーション言葉であります。もともと農耕民族であり、黙々と1日中ほとんどしゃべらずに仕事をしてきた人たち、たとえば陶器、炭焼きの職人は、人間ではなく自然と向き合うところから文明を切り拓いてきました。そのコラボレーションであれば生きられるという人達もいます。全部が営業マンや公務員、サラリーマンにならなくてもいいのです。じっくり何かに取り組むということでもいい。それぞれの持ち場で生きる道を拓くということです。過度な競争で打ち勝った者だけがある特典を得る時代ではなく、行き着く先の道を選ぶ幅のひとつとして、自然と直接向き合う、語り合う、そこで共存・共生しあうということを用意出来るとしたらすごく大きいことです。ひきこもりといっても集まる所には集まるのです。中には重症で家から一歩も出られない人もいますが、かなりの人は社会に参加したいと思っているし、何か自分にあった仕事が出来ればよいと思っています。思っているが、目標に向かう手段が結びつかないのです。自然がその繋ぎをやるというのは重要なポイントだと思います。

・事務局（中部電力 田村）

居場所を見つけるという話が出ましたが、障害者自立支援法が社会参画を促すという意味で変わり、障害者の方々が地域に自分の居場所を見つけなければならなくなると聞いています。その辺の話をお聞かせ願います。

・園芸福祉士 横井氏

今年度、愛知県が障害者の自立に関する子育て支援のモデル地域となりました。これから小学校にあがる子を対象とした子育て教育で、親の問題でもありますが、親が子育て教育に参加して、園芸や音楽的なことをやっていく中で、どうやって子育てをしていくかということをも文部科学省の助成金の中でやっております。

・市民活動 佐藤氏

最近あまり話題にならないが、10年前に米国でコミュニティガーデンというのが話題になりました。米国のスラム街で、公園が犯罪によって閉鎖される状況が実際にあり、それに対し、NPOのプログラムによって、青少年から成人まで含めたボランティアが公園に花や緑、野菜をつくって公園の再生、地域の犯罪防止も含めた再生が行われたという例で、品川区が米国にわざわざ調査に行っています。自分も注目して見ていましたが、日本の場合、そこまで極端でないので、グラウンドワークとかナショナルトラストのようなものが英国から紹介されるようになりました。その後、なぜかドイツから紹介されたビオトープがブームになって、あまりコミュニティガーデンが話題にならなくなりました。

ちなみに名古屋市緑区でも緑池公園という小さな公園の愛護会をつくる時に、わざわざ「コミュニティガーデン愛護会」という名称にしています。公園を通じて地域の方々が仲良くなることを目的とした公園愛護団体ということを明確にするため、コミュニティガーデンというのを愛護会の名前につけたのです。また昭和区で

も、ふれあい公園という所で、子育てを中心に地域のみんなで公園に関わっている例もあります。

・名古屋市みどりの協会 緑化センター 村上所長

鶴舞公園に花菖蒲があるが、花菖蒲は植え替えないと腐ってくるので、余った苗を区民の方に分けて、来年も花を咲かせようということをしています。今年もイベントで区民から作品が出展されており、こうしたことを続けていきたいと考えています。

また、緑化センターの住所は鶴舞168番地ですが、番地にちなんでイロハ会というコミュニティグループをつくっています。そこで花壇の植え替えや花の植え替えをしています。イベントも自主的に企画し参加するようになり、すでに3年目になっており、これは誇らしい話であります。

さらに、秋になると、どんぐりの木が実をつけますが、遠足に来る子どもたちを対象にどんぐりの説明をしようというご案内を先生方にしたところ、結構人気で、ボランティアを講師として説明させています。ボランティアの方は中高年の方が多いのですが、自分の孫に教えるようなもので、新鮮な刺激で楽しいという話を聞きます。子ども達も生の自然に触れるわけで大変感動したという話を聞きます。こうした活動を今後も公園の中で実践していきたいと考えています。

・事務局（中部電力 田村）

公園というものが、いろいろな活動をし、交流し、元気をもらって帰る、そういう場になればいいと思います。花、緑というのは非常にアプローチしやすい活動と考えており、引き続きご支援いただきたいと思います。

・名古屋産業大学 伊藤名誉学長・特任教授

この設立準備会は、花、緑、健康、地域づくりと4つのキーワードが入っています。地域づくりというところで、今日の話で社会の病を治すのは社会の力であるということでした。引きこもりや児童虐待というケースは家庭内のことでなかなか見つけられません。昔だったら、向こう三軒両隣、井戸端会議など、あそこの家の子どもは今どうしているといったことをみんながわかっている社会があり、それがあってはじめて人間の社会の力が働いていきます。

ところで名古屋産業大学では毎年、高校生を対象に環境をテーマとした作文を募集して、優秀作品として30点ぐらいを表彰しています。

その中でも印象に残っている作品がありました。その高校生は家と学校を行き来するのみで隣近所に全く関心のない生徒でした。自分たちの地域の中で植樹をするという事業があり、一度参加して植樹をしてみました。やったことはそれだけなのですが、その後、学校の行き帰りに自分が植えた樹がだんだん育っていく様子、季節ごとに変わっていく様子に気がつき、雑草をとったりと関心を持つようになりました。その次の段階として、他の植樹活動の場にも積極的に参加するようになりました。今では毎年、花植えや植樹の行事に参加するのを楽しみにしているとのこと。街の中にもだんだん緑が増えてきて、大変よいことだと思うし、みんなが参加している姿を見て感動している、といった内容のものでした。

ささやかな体験を綴ったものですが、そのことを通じて環境に関心を持つようになりました。これもひとつのコミュニティ、社会力が子どもの感性を育てる例であり、子どもが社会、地域に関心を持つようになるよい例です。こうした子どもがたくさん育っていく地域では社会の病は少なくなっていくのではないのでしょうか。

われわれのテーマは花と緑、健康な地域づくりですが、さきほど紹介したケースはまさにこの準備会がめざしていることではないかと思います。花と緑が地域にあ

たえるさまざまな効用の中に、社会力を養う、社会の病を癒していく、というものがああります。花と緑を育てて健全な社会をつくっていく力、そうした力をどうやってわれわれが植え付けていくことが出来るかがテーマになると感じました。

以上で私のまとめといたしますが、加藤先生には今後ともこの会にご参加いただき、ご指導いただければと存じます。本日はありがとうございました。

(4) 報告事項（事務局）

- ・配布資料の新聞記事は、公園という場の役割をもう一度見直そうという動きについてであります。公園は今まで行政が整備して市民が使うという関係でしたが、市民が公園自体を育てながら、そこで市民が交流するという活動が盛んになってきているという内容です。市民が自分たちで花を育てるということで、コストを抑えつつ、自分たちも活動しながら楽しめるというのが一番大きいと思います。自分たちが参加しながら、自分たちが居場所を見つけられるような公園をつくらうということであり、先ほどの加藤先生の話にあった自分たちの居場所と役割を、公園、緑化の活動をする中で見つけていくものだと思います。以前、和泉先生からオープンガーデンの話がありましたが、この記事の中でも、市民によるオープンガーデンの話が紹介されており、それが交流につながり、防犯にもつながっています。また、市がそうした活動の事務局を市の中に設けているケースがあり、まさに市民と行政がコラボレーションしているよい例ではないかと思えます。公園という公共空間をまさに市民と一緒にコラボレーションしている例であります。また欧米の公園では市民がベンチを寄付する例もありますが、市民が公園を一緒につくっていき、地域の愛着を育む仕組みが出来ています。日本でもそうした仕組みが広がるとよいのですが、道路や河川敷も含め、公園などの公共空間が、少子化の中で利用度が下がってきています。そうしたものを市民が活動する中で、活用していけるとよいと思います。
- ・次に今後のスケジュールですが、8月20日にNPOのみなさんと一緒にシンポジウムを開催する予定であり、現在、詳細を調整中です。またご案内いたしますので関係者に参加いただいたり、関心のある方にネットワークで周知の方もお願いしたいと考えております。
- ・また、園芸福祉入門講座を9月9日にブルーボネットで無料で開催しますのでご関心のある向きはおいでいただきたいと思えます。これが市民活動のコーディネーターを育てようという活動であります。9月30日には初級園芸福祉士養成講座を開催します。今回、新しい取り組みとして、あいち健康プラザでも実施することとなり、健康講座もプログラムに採り入れて行う予定です。従来のブルーボネットと併せ、2会場で行う予定です。
- ・当初は3月頃にフォーラム設立記念のシンポジウムを考えていましたが、12月頃に全国規模のシンポジウムをやりたいと考えています。会場など未定ですが、農林水産省から、状況によっては予算もある程度出してもよいという話をいただいております。愛知県発で全国規模のものをやりたいと考えています。国の補助が出ることもあり、地元の自治体である県、市町村のみなさんにご支援をいただかなければならない場合がありますので、計画内容が固まる段階でいろいろとお願いをしつつ、愛知県全体で何とか成功させたいと考えています。
- ・今後、勉強会を粛々と進めつつ、もう少し情報発信もしていきながら、実際に担い手となっていただく市民の方々と連携を強化し、地域のコラボレーションとして活動を進めていきたいと考えていますので、ご支援をお願いいたします。なお、来月の勉強会はまだ調整中のため、別途連絡させていただきます。

5 配付資料

- ・講演資料「心理学から見た社会の病と癒し」
- ・「あいち花と緑を活かした健康増進地域づくりフォーラム」設立準備会・第5回勉強会参加者
- ・園芸福祉活動の展開イメージ（今後のスケジュール）
- ・園芸福祉入門講座開催のご案内
- ・平成18年度初級園芸福祉士養成講座開催のご案内

以 上